

九国プレ2013

国語

九州国際大学附属中学校

【注意事項】

- 1 開始合図のチャイムが鳴るまで、この問題用紙の中を見てはいけません。
- 2 開始合図のチャイムが鳴ったら、最初に解答用紙と問題用紙に受験番号・氏名を書きなさい。
- 3 試験時間は50分です。
- 4 解答はすべて、問題の指示にしたがって解答用紙に記入しなさい。
- 5 問題用紙で、印刷がはっきりしないところがあったら、静かに手をあげなさい。
- 6 答案ができあがっても、終了合図のチャイムが鳴るまで静かに着席していなさい。

字数制限のある問題については、句読点なども一字とします。

受験 番号		氏 名	
----------	--	--------	--

【一】 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、字数指定のある問題は、句読点なども一字と数えます。

人間を含めすべての動物にとって、生きるとは、他の命を殺すことで成り立っています。だからそこには④ホンライいつも、このような真剣な命のやり取りがあったはずなのです。

A 現代社会では、良くも悪くも、ぼくたちは①そういうことを全く感じることなく、他の動物を食べ、生きていくことができるようになっていきます。すべてが分業になり、ほとんどの人が直接動物を殺す場面向き合う必要がないということとともに、人間がその技術によって、他の動物とは比べ物にならない大きな力を得てしまったことがその理由と思われる。

インドネシア東部にあるレンバタ島の小さな村

B この時代に、ラマレラの男たちが命を懸けて巨大な動物と向き合い戦って、日々の糧を得ている現実には、ぼくたちに強烈なインパクトを②与えます。そして同時に、彼らの姿を見ることで、生きていくということがいかに大変なことなのかを改めて感じさせられるのです。③忘れてしまった大切なものを、再び思い出させてくれるのです。

後に本で読んだところによれば、ラマレラの男たちがマツコウクジラの捕獲に⑥セイコウすると、⑦ゼツメイしたクジラを船にしっかりとくりつけたあとに、ラマファが全員に聖水をふりかけ、④みなで祈りの十字を切るそうです。C、こんな⑧ヨロコビの歌を歌いながら、クジラを浜辺までひいていきます。

「象牙をもったスイギユウのような大きなクジラよ、一緒に村に帰ろう。我らに食を与えてくれ、村に食べ物を与えてくれ」

『クジラと生きる』 中公新書

彼らにはきつと、自分たちが生きていくために他の動物の命を奪っているのだという * が明確にあります。そして、自分たちが命を奪った動物を⑨ウヤマイ、深い感謝の念を捧げるのです。

(近藤雄生『旅に出よう―世界にはいろんな生き方があふれてる―』より)

問一 ―― ㉠㉡のカタカナを漢字に直しなさい。(送りが必要なものは、送りがなもふくめて書きなさい。)

問二

A

C

 にあてはまる最も適当な言葉を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア だから イ つまり ウ しかし エ そして

問三 ―― ①「そういうことを全く感ずることなく」とありますが、その理由にあたる部分を本文中から探し出し、最初と最後の五字を書き抜きなさい。

問四 ―― ②「与えます」の主語を次から選び、記号で答えなさい。

ア 糧を イ 現実には ウ ぼくたちに エ インパクトを

問五 ―― ③「忘れてしまった大切なもの」とありますが、私たちは何を忘れてしまったのですか。次の文の空らんにあてはまる最も適当な言葉を本文中から探し出し、それぞれ十字以内で書き抜きなさい。

私たちは他の動物との

十字以内

 の末に、

十字以内

 で生きているということ。

問六 ―― ④「みなで祈りの十字を切るそうです」とありますが、何のために祈るのですか。その目的を説明している一文を探し出し、最初の五字を書き抜きなさい。

問七 *にあてはまる言葉として最も適当なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 使命 イ 悪意 ウ 反省 エ 自覚

問八 この文章の表現の工夫として最も適切なものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 引用文を用いることで、ラマレラの男たちの生活が身近に感じられ、クジラの捕獲の楽しさが強調されている。
- イ 現代社会でのわたしたちの生活とラマレラの男たちの生活を比べることで、生きるとはどういうことなのかを印象づけている。
- ウ たとえの表現を多く用いてラマレラの男たちの生活を述べることで、生きることの難しさを印象づけている。
- エ 現代人とラマレラの男たちの動物に対する考え方の違いを比べ、現代人の考え方が間違っていることを強調している。

二 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。なお、字数指定のある問題は、句読点なども一字と数えます。

亡くなった兄に似ている僕（タケル）を見つけ、千波は馴でいきなり僕に声をかけた。それがきっかけで恋人になったタケルと千波。千波とその両親はタケルを亡くなった兄（誠）に重ね、兄と似ているところを見つけては嬉しそうな顔をしている。そんなとき、僕は音楽一家だったこの家族が、兄の死から一切演奏していないことに気づき、兄の物だと聞いたフルートを練習し、お父さんの誕生日パーティーの時に一緒に演奏しようと提案した。

僕はフルートをしっかり持って立ち上がった。

「演奏ってみんなまで？」

お母さんが言った。

「ええ。お父さんとお母さんと千波さんと僕で……。僕は千波さんのお兄さんとは違う。お兄さんと似ていることを光栄にも思うし、悲しくも思う。ただ、僕は千波さんが好きだし、お父さんとお母さんが嬉しそうな顔をされるのを見るのは嬉しい」

僕がこの家でお兄さんのことを口に出すのは初めてだった。もちろん、お父さんやお母さんが、お兄さんのことを口にすることもなかった。誰も誠さんの存在に触れることなく、今まで過ごしてきた。それが突然崩されて、お父さんもお母さんも①戸惑っていた。

「演奏って、タケル君吹けるの？」

千波ちゃんが言った。

「吹けるよ。②僕がフルートを吹きます」

まだ、みんな座ったままぼんやりと僕を見上げていた。僕は差し出がましいことをしているのだろうか。誠さんに近づこうとして、みんなを不愉快にさせているのだろうか。でも、ここまで来て、もう③後には引けなかった。

「あの、何か演奏しましょうって言っても、僕、二、三曲しか吹けないんです。クラプトンなんかどうですか？」

「いいね」

お父さんがようやく言った。

「①素敵ね」

お母さんも言った。

「じゃあ」

「ティアーズ・イン・ヘヴン？」

千波ちゃんが言った。そのとおり。僕はその曲しか吹けない。千波ちゃんが時々自然に口ずさむ曲。それを練習した。

「全然手入れしてないからな」と、お父さんが押入れから出したギターのチューニングをする。お母さんが「しばらく歌ってないんだもの。恥ずかしいわ」などと言いながらも発声練習みたいなことを始める。リビングが音で②満ちはじめる。それはとても美しい光景だった。

(中略)

お父さんのギターは音の歪みはあったけど、味があつて泣かせた。お母さんの声はきれいで澄んでいてすんなりと心に落ちた。千波ちゃんのピアノはお父さんのギターにもお母さんの歌にも僕のフルートにも③協調していた。僕のフルートはとてもひどいものだったけど、僕たちの演奏はすばらしかった。僕はこんなに美しい音楽を聴いたことがないと思った。

お母さんが「もう一度やりましょう」って言って、千波ちゃんが「今度はもう少しゆっくり吹いてみて」って言って、結局、ティアーズ・イン・ヘヴンは四回演奏された。そして、みんなとても * そうな顔をしていた。お兄さんのいた頃の家族がよみがえったのだろうか。音楽が途切れた後も、リビングはずっと温かく④活気づいていた。

最後にお父さんは玄関口で、ちゃんと僕の顔を見て、僕の名前を呼んだ。

「Aまた来てね。タケル君」

「また送らないといけないからいいよ」って言ったのに、千波ちゃんは僕と一緒に歩きはじめた。寒い歩道に二人の息が白く浮かぶ。

「フルート、うまいね」

千波ちゃんが僕のポケットに手を入れながら言った。

④全然

「すごい良かった。本当に。驚いた」

「結構練習したんだけど、簡単なのしか吹けない。お兄さんみたいにはいかないよ」

「兄はフルートなんか吹けなかったわ」

千波ちゃんがまっすぐ前を見ながら言った。

「え？」

「お兄ちゃんはフルートなんか吹けないの」

「だって、フルート」

ピアノの上には確かに使い込んだフルートがあった。

「あのフルート、お兄ちゃんが友達にもらったの。で、せっかくもらったんだから始めようとしたんだけど、何回か吹いてみて、あっさりと諦めちゃった。お兄ちゃんほどなくさいから音が出せないのよ。フルートって音を出すの難しいでしょ？それで向いてないって。簡単に投げ出してしまって、それっきり。だから、お兄ちゃんはまったく吹けないの」

「そうだったの」

⑤僕はここ何日かの努力を思い出して、どっと疲れた。

(中略)

「あんな素敵な曲、父さんも母さんも私も、きくと聴いたことがないと思う」

みんなで合奏をしてリビングの空気が動き出したような気がしたのは、家族がよみがえったからじゃなくて、新しくなってしまったからだったのだろうか。僕は大きく息を吐いて目をつむってみた。ティアーズ・イン・ヘヴンはまだ耳の奥にしっかりと残っている。とにかく素

敵な曲が㊤奏でられた。みんながそう思ってる。それでいいのだ。

「タケル君は兄とは全然違う。フルートだって吹ける」

千波ちゃんが嬉しそうに言った。

「B私、タケル君が好き」

「うん」

僕はうなずいた。

(瀬尾まいこ『優しい音楽』より)

問一 ――― ㉠㉡の漢字の読みを、ひらがなに直しなさい。

問二 ――― ①「戸惑っていた」とありますが、なぜお父さんとお母さんは戸惑ってしまったのですか。それを説明した次の文の空らんにあてはまる言葉を、本文中の言葉を使って三十字程度で答えなさい。

僕がお兄さんのことを初めて口に出したことで、三十字程度から。

問三 ――― ②「僕がフルートを吹きます」とありますが、なぜフルートを演奏しようと思ったのですか。その理由を説明した最も適当な文を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 幼いころにフルートを吹いたことがあるので、フルートを吹けば音楽一家のこの家族に打ち解けられると思ったから。
- イ 特別な日にフルートを吹くことで、千波ちゃんとその両親に誠さんの死を受け入れさせ、認められようと思ったから。
- ウ フルートを吹くことで、自分の演奏技術の高さをこの家族に示し、音楽のすばらしさを伝えてあげたいと思ったから。
- エ 誠さんの代わりにフルートを吹くことで、誠さんのいた頃の家族をよみがえらせ、この家族を喜ばせたいと思ったから。

問四 ――― ③「後には引けなかった」という言葉を使って、読めば内容や様子がよくわかるように工夫して、短文を作りなさい。ただし、「後には引けない」や「後には引けず」など、形を変えても構いません。

問五 *にあてはまる最も適当な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 複雑
- イ 悲し
- ウ 満足
- エ 誇らし

問六 —— ④ 「全然」とありますが、「全然」のあとに続く言葉を自分で考えて答えなさい。

問七 —— ⑤ 「僕はここ何日かの努力を思い出して、どっと疲れた。」とありますが、このときのタケルの様子として最も適当な言葉を次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 腰を抜かした イ 力が抜けた ウ 衝撃を受けた エ 腹が立った

問八 —— A 「また来てね。タケル君」 —— B 「私、タケル君が好き」とありますが、このお父さんと千波の言葉から、タケルに対しての気持ちの変化が読み取れます。この家族はタケルをどのような存在としてとらえるようになりましたか。それを説明した次の文の空らんにあてはまる言葉を、本文中から指定された字数で書き抜きなさい。

兄の代わりにフルートを演奏したタケルだったが、タケルの思いとは違い、千波とその両親はタケルを 1 (七字) 存在だと認めることができ、この合奏を通して家族がよみがえったというよりもむしろ 2 (五字) たことを感じた。

三 次の各問いに答えなさい。

問一 漢字の読みには音と訓があります。次の熟語の読みは の中のどの組み合わせになっていますか。ア～エの記号で答えなさい。

- ① 台所 ② 筋道 ③ 手製 ④ 砂糖

ア	音と音	イ	音と訓
ウ	訓と訓	エ	訓と音

問二 次の文は、どの言葉の意味を説明したものですか。最も適当なものをア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

① 相手をおそれて、ためらいながら何かをするさま。

- ア おずおず イ おろおろ ウ おちおち エ おいおい

② 目をそらさず、じつと見つめるさま。

- ア じろじろ イ まじまじ ウ ちらちら エ じわじわ

③ あれこれと気をもんで、いらだつさま。

- ア もぞもぞ イ あたふた ウ やきもき エ うずうず

問三 次の熟語のカタカナを漢字に直し、その一字を書きなさい。

- ① 世界イ産
② 消ヒ税
③ 参ギ院選挙